「アール・ブリュット」と障がい者アート：「芸術」として、「支援」として、そして「コミュニケーション」として

関　　久美子

“Art Brut” and Art of Handicapped: A Consideration in the aspect of “Art,” “Welfare Support,” and “Communication”

Kumiko Seki

1．はじめに

厚生労働省では平成13年に第１回「全国障害者芸術・文化祭」を大阪府で開催したことはじめとして、文部科学省や文化庁と共同で障がい者の芸術活動を支援するための懇談会を開催してきた。元来、障がい者の芸術活動は余暇活動やリハビリ的機能といった観点でしか語られてこなかったが、徐々に個人の才能や個性として捉えられ、その才能を伸ばす試み、作品を芸術品として商品化し販売すること、そしてあらたな才能の発掘と評価という視点にシフトされてきた。平成27年には「2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた障害者の芸術文化振興に関する懇親会」が設置、開催され、平成29年には「障害者芸術文化活動普及事業」が実施され、支援のノウハウを全国に展開し障がい者の芸術文化活動の更なる振興を試みている。

近年日本では「アール・ブリュット展」と銘打って障がいを持つ作者の作品を展示する展覧会が多く開催されている。本来「アール・ブリュット」とはフランス人画家であるジャン・デュヴュッフェが提唱した、正規の美術教育を受けていない者などによる作品、「生（き）の芸術」を意味する言葉であるが、日本では「アール・ブリュット＝障がい者のアート」とされる傾向があり、芸術批判的観点、そして福祉支援的観点からもそれを問題視する声が聞かれる。前述の通り今後全国規模で障がい者の芸術活動がより盛んになれば、その在り方や評価方法と同様にさらに芸術的観点・福祉的観点から語られる機会が増えるであろう。

本稿では、まず日本での障がい者の芸術活動の流れ、また「アール・ブリュット＝障がい者アート」とすることの問題点を整理する。次に筆者が所属する新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部地域貢献センターが開催したアール・ブリュット展とセミナー＆ワークショップの事例報告とともに、ノーマライゼーションの観点からは好まれないであろう「障がい者アート」という呼称をあえて使い、これが「健常者文化」と「障がい者文化」をつなぐメディアとなり得る可能性、また「障がい者アート」特有の魅力について「コミュニケーション」をキーワードに、学生が制作した作者・作品を紹介するキャプション、そしてセミナーに参加した学生のレポートから考えてみたい。

2.「アール･ブリュット」とは

「アール･ブリュット（Art Brut)」とは1945年にフランス人画家、ジャン・デュヴュッフェが提唱した､｢art=芸術｣｢brut=加工されていない｣すなわち､正規の美術教育を受けていない者などによる作品､また従来の文化規範から逸脱した作品である｢生（き）の芸術｣を意味する言葉である。デュヴュッフェがこの「アール･ブリュット」という言葉を提唱する以前は、障がいを持った作者の作品は「精神分裂症の芸術」や「精神病理学的美術」とカテゴライズされており、必ずその作品には作者の病理的背景が共存していた。デュヴュッフェはこれらの作品を医学の分野から切り離し、より芸術の分野で評価すべきとこの造語を用いた（服部、2011)。

さらに重要な点は、デュヴュッフェは決して障がい者のアートを総称して「アール･ブリュット」としたわけではないということである｡彼は著書｢文化的芸術より好ましいアール･ブリュット｣の中で､｢消化不良の人の芸術や膝の悪い人の芸術というものがないように狂人の芸術というものはない｣と述べている（末永、2012)。すなわち敢えて誤解を恐れずに「狂人」を「障がい者」と捉えた場合、決して「障がい者の芸術｣などというものは存在せず､ただその作品には障がいという特性から生み出された｢狂気｣が存在するのであり、伝統的芸術には見られないその「狂気」にこそ高い芸術的価値があるのだと言う。また前述した「正規の美術教育を受けていない者などによる作品、また従来の文化規範から逸脱した作品」の作者は決して障がい者だけでなく、幻視家、霊媒師、宗教家や囚人といった文明や芸術文化から隔離された者も含まれる（服部、2017. 6. 3)。そのような作者たちの作品には「マジョリティ」の想像の範囲を超えた｢狂気｣が反映され､芸術的にも称賛すべきすぐれた作品であり､それこそがジャン･デュヴュッフェの言う「アール･ブリュット」だとされている。

3．日本での障がい者アートの流れ

日本における障がい者アートの第一人者は山下清である。精神科医式場隆三郎は山下の才能を見極め、彼を「日本のゴッホ」と銘打ってプロモートし有名にした。しかしそのプロモーションは仕掛け人である式場にもともと非好意的であった日本の美術界の反感を大きく買う結果となり、山下清はもとより、障がい者全般の作品は美術界から締め出され、教育・ないしは福祉というポジションに位置づけられた（服部、2011)。

このように日本では障がい者の制作した作品は芸術というフィールドでは語られてこなかった時期が存在したが、しかしその間でも障がい者の芸術活動は継続し支援されてきた。宮地（2013）は日本での障がい者の芸術活動を「福祉」「芸術」「福祉と芸術の脱境界線」という３つの視点からそれぞれ支援してきた代表する団体を以下の通りあげている。

まず一つ目は1976年奈良市に設立された市民団体「財団たんぽぽの家」である。この団体は福祉の視点から障がい者のアート活動を支援する「エイブルアート」を推進しており、障がい者が芸術活動を通して自らを自由に表現できる機会を得ることで、障がい者に限らず健常者も含めた豊かなまちづくり、豊かな社会や文化を創造する可能性に着目している。同法人常務理事の岡部（2016）は、「アートを通した障害のある人の社会参加」という視点から「地域社会の中で、わたしたちは障害のある人と何ができるか」という視点にシフトしていくことが重要だと述べている。

二つ目は芸術の視点から、作品自体の芸術性に着目しその価値を正当に評価しようと試みる「アトリエインカーブ」である。このアトリエは2002年大阪市に設立された社会福祉法人素王会のアート･スタ

ジオとして開設され、知的障がいのあるアーティストを対象に創作活動の環境を整え、作家として独立することを支援しており、実際に国際的な美術コンベンションで入賞する作家、個人のアーティストとして活躍する作家などを輩出してきた。このアトリエでは「障がい者アート」「アール・ブリュット」「エイブルアート」という呼称は使わず、すべてを「現代アート」として発表し、個人の才能が社会に認知されていくことを尊重している（今中、2016）。

三つ目は滋賀県大津市にある企画展のみの美術館、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAである。2004年頃より他に先駆けて作家の発掘調査を始め数々の展覧会を開催してきたが、NO-MAは福祉や芸術といった概念だけにとらわれず、アール・ブリュットを多文化共生を目指すための基盤として考えている（小林、2016）。福祉と芸術の脱境界線を目指し、障がい者とそうでないアーティストの作品を同時に展示するなど、「人の持つ普遍的な表現力」を通して多文化社会に存在する多様なボーダーを越えていくことを試みている。

４.「アール・ブリュット」という名称を障がい者アートに使用する問題点

冒頭でも述べたが、近年「アール・ブリュット展」と銘打って障がいを持つ作者の作品を展示する展覧会が多く開催されているが、日本では「アール・ブリュット＝障がい者のアート」とされる傾向があり、さらには障がいを持つ者が制作した作品すべてを「アール・ブリュット」とカテゴライズしてしまう危険性も垣間見られ、定義的視点、芸術批判的視点、福祉的視点からも議論されている。

まず定義的視点からあげられる問題点は、アール・ブリュットという言葉を提唱したジャン・デュヴュッフェの「消化不良の人の芸術や膝の悪い人の芸術というものがないように狂人の芸術というものはない」という言葉から、本来「障がい者のアート」というものはなく、「アール・ブリュット＝障がい者アート」とするのは好ましくないというものである。障がい者、非障がい者という区分は文明が押し付けた恣意的なものにすぎず、むしろデュヴュッフェはそういった社会側の都合で作られた「ラベル」を排除するためにこの言葉を提唱した。すなわち「アール・ブリュット＝障がい者アート」とするのはデュヴュッフェの思惑とは正反対の考え方である（服部、2017. 6. 3）。

次にあげるのは芸術批判的視点からの問題点である。加茂、有川（2015）は日本のアール・ブリュットは作品の質による選別であると同時に「障がい者アート」という作者の資質に関わる選別を内包していると述べている。彼らの研究では、実際に大学生を作品の鑑賞者として作者に障がいがあると知らせると、その作品に対する評価が上がったという結果が出ている。しかしデュヴュッフェいわく芸術において存在するのは常軌を逸した特別な美術と凡庸な普通の美術という差でしかない。芸術とは直感的鑑賞によって評価するものであり、作者の障がいの有無やその背景は芸術を評価する上で無用である、芸術において障がい者を特別扱いする必要はないといった議論があがっている。

最後は支援的視点から見た問題点である。服部（2016）は「アール・ブリュット」という言葉を使うことで「障がい者の芸術」というラベルから生ずる排他的な印象を和らげることができるが、それはすなわち「障がい者の芸術」という選別が有する「障がい者の隔離という構造」を隠蔽することになると述べる。さらに「隠蔽」するということは皮肉にもその対象である「障がい者」というサブカルチャーが存在することを認める結果となる。社会的なインクルージョンのために真に重要なのは精神のバリアフリーであるにも関わらず、障がいのある人を支援すべき対象として分離している限りそれは実現しない。すなわち「アール・ブリュット」という名称を使い「障がい者の芸術」を囲い込み続けている限り、真のインクルーシブな社会は形成されないというものである。

また障がい者の芸術活動は彼らの活動の幅を広げ社会へ参加、さらには社会へ進出するきっかけともなる活動である。「アール･ブリュット」のカテゴライズの下、「障がい者アート」は過剰に評価が与えられるリスクも含まれ、本来の活動に対する正当な評価を歪めてしまう可能性もある（加茂、有川、2015）。これは逆に真の才能をもった障がいのある作家が芸術界のメインストリームで活躍することを妨げる危険性も伴っていると考えられる。

5.「コミュニケーション」という視点から

前述した通り、2020年オリンピック・パラリンピックの文化プログラムに向け、国としても障がい者の芸術活動を支援する事業など、今後も障がい者の創作する作品に注目が集まっていくことであろう。それにともない「アール･ブリュット」という言葉に包まれた障がい者アート、あるいは「障がい者の芸術」という囲い込みに関する議論がさらに高まることも予想される。しかし今までこの障がい者アートは「芸術」と「支援」の視点のみでしか語られてこなかったように思われる。今回筆者が所属する新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部地域貢献センターが主催した「私たちの街　新潟のアール･ブリュット展」と題した展覧会と「アール･ブリュットってなあに？～その魅力と楽しみ方～」と題したセミナー＆ワークショップを通して、障がい者アートを「コミュニケーション」という視点から考察したい。

5－1．アール・ブリュット展とセミナー＆ワークショップの試み

アール･ブリュットに関連する企画は筆者の勤務する新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部の新校舎竣工を記念して2017年７月９日（日）～７月16日（日）にかけて行われた「地域の福祉と子育て」をテーマにした「地域貢献ウィーク」で同大学・短期大学部の地域貢献センターが企画したものである。地域貢献がテーマということで、地域の方々にも多く大学へ足を運んでいただくことが目的から、テーマの一つである「福祉」と一般の人々でも興味の持てる「アート」というものを融合させることで、地域貢献センターの目指す多文化共生にも合致すると考えこの企画を提案した。開催にあたり新潟県アール･ブリュット･サポートセンター（NASC）から大いにご協力いただいた。

展覧会の開催においてはNASCのアートディレクターである角地氏から学生とぜひコラボレートしたいという提案を受けた。実際に施設を訪問し、障がいのある作者が作品を作るところを間近で見学し、支援者の話を聞き、実際に本学で展示する作品や作者のキャプションを制作するという試みである。そこで大学の臨床心理学科から３年生５名、短大幼児教育学科から２年生５名、人間総合学科から１年生５名の合計15名でこのプロジェクトに臨んだ。まずは障がい者アートについて、そしてキャプションの制作方法について学び、次に６つのグループに分かれてそれぞれ施設にお邪魔した。その後各自でキャプションを作成し、最後のワークショップで互いのキャプションを共有し、最終的な手直しをして完成させた。また学生は実際の作品搬入･展示・搬出にも関わってくれた。

セミナー＆ワークショップでは最初の30分ほど、角地氏を講師に障がい者の芸術活動について講義していただき、その後はワークショップを行った。ワークショップでは実際に作者の制作活動を支援されている家族や施設の職員の方々を囲んで、その方が持参してくださった作品を各グループ５～６人でだまって鑑賞し、それぞれ感じたことや疑問に思ったことを付箋に書いていく。その後支援者はその付箋に書かれたキーワードをもとに作品や制作過程、作家自身の話をするといったものである。参加者は学生と一般で60名、プラス支援者を含めて全体で70名と盛大に行われた。

このように「アール･ブリュット」と銘打って「障がい者のアート」というカテゴリーで囲い込みを

して展覧会を行い、作者の病歴やその作品のできる背景、作者や支援者の心情を共有しながらの作品鑑賞という本学で行った試みは前述した定義的、芸術批判的、支援的視点の問題点を見事に網羅したものであった。しかしこの一連の試みには多くの「コミュニケーション」というキーワードがちりばめられており、異文化理解という観点からも、障がい者アートは健常者（強者）と障がい者（弱者）の関わりではなく、よりインクルーシブな繋がりを目論むメディアであると実感した。

５－２.「遠慮の構造」の解体（健常者の言葉で語られる障がい者）：展覧会のキャプション制作から考える

我々の社会において「多文化社会」という概念に対する意識は以前よりも増していると感じる。テレビなどでもさまざまな障がいを持つ方をクローズアップする番組や、障がいのある方自身がメインとなって創り上げていく番組など、メディアでも当たり前のように目にするようになってきた。今まで負のイメージしか持たなかった「障がい」という概念も決して「悪いことではない」「アンタッチャブルなことではない」というようにイメージが払拭され、障がいの有無に関わらず、みな社会を構成する一員として共生していこうという意識変化の過程にある。しかし「障がい」という概念は受け入れるべきものとされる一方、実際に障がいを持った方々と出会うこと、ましてやコミュニケーションをとる機会はそれほど多くないというのが現状である。障がいのある人もない人も等しくこの社会で生活していくべきであるというノーマライゼーションの考え方が普及すればするほど、健常者は障がい者文化がどのようなものであるか理解しないまま、ただ「差別してはいけない」という強迫観念に縛られるかのように「障がい」という概念を語ることに遠慮や危険すら感じる社会になるのではないか。小浜（2000）は自分とは違うマイノリティや弱者への配慮のあり方が言いたいことを言いづらくさせる「遠慮の構造」をこの社会に作り上げていると述べる。さらに岩隈（2002、P.133）は「この『遠慮』という澱んだ空気が社会の風通しを悪くし、人は口をつぐみ差別・偏見は解消どころかかえって人々の中で深く沈殿して凝固してしまい、対等なコミュニケーションが難しくなる」と懸念している。

今回の展覧会の学生コラボの試みでは、有志の学生15名が施設を訪問し、実際に作家やその支援者と話し、創作活動を見学して作者やその作品について感じたことをキャプションにまとめた。キャプションは各自思い思いのデザインでイラストや写真などを入れ、カラフルに仕上がったが、ここではいくつかのキャプションの内容を一部抜粋して紹介する。

キャプション文（〇〇は作者名）

お写真を撮らせてとお願いしたとき〇〇さんはとても素敵なポーズを決めてくれました。作品についてお聞きしたとき、どのような場面をかいたのか、どうしてこの色にしたのかなど、とても細かいところまで教えてくれました。私は一瞬で〇〇さんの人柄やその作品に惹かれました。

実は先日まで、実習に伺わせていただいていました。普段の〇〇さんの様子は働き者で、実習生の私に「頑張ってる？」「疲れたね」と声を掛けてくださいます。また機械が好きで、難しい機械の名前を知っていたり、この前は掃除機を楽しそうにかけていました。

「〇〇さんのユニークエピソード」

その１：いつもテレビはつけっぱなし！？〇〇さんの部屋にはいるといつも、いつも、いつもテレビはつけっぱなし？さすがに寝ているときは消しているらしいが、部屋にいない時もテレビは

つけっぱなし。

その２：実は・・・○○さんは収集癖がある！？「どこから持ってきたの？」というものが部屋中にある。中でもすごいものは・・・これだ！（「通れません」と書かれてあるポスター）しかも、○○さんが貼ったところはなんとロッカー！？素晴らしいセンスだ☆

実際の接触を通して、学生にとって最初は「障がいを持った作者」というステレオタイプ化された対象者が、障がいの有無はもはや重要なことでなく、ユニークな個性を持った「個」として捉えていることが分かる。学生が直感的に「おもしろい」「かわいい」「すごい」と感じられる「作品」というメディアを通した障がいを持つ作者とのエンカウンターは、福祉施設訪問で障がい者とのコミュニケーションを強要されるような福祉教育にもなく、ボランティアのように「強者」が「弱者」のために「何かしてあげる」といった力的な社会的構造も存在せず、学生にとってより自然でかつより興味深いものであったと推測できる。「作品」を通して、作者の人間性に魅かれ愛情をもって作品や作者自身を語ったこれらのキャプションは、障がい者文化を理解する第一歩となった。本来、「配慮」が邪魔をして語られなかった言葉、あるいは健常者が発することによって「差別」と捉えられる言葉も、愛を持って語ればそれは決して優劣を表すものではなく、誰もが独自の特性を持つように、それらも彼らの愛すべき個性の一つとして表現されている。健常者が誤解を恐れずに障がい者を語ること、障がい者も「障がい者文化を知らない者」「障がい者文化を学ぶ過程にある者」として健常者を理解し、猶予を与えてくれることも多文化共生社会現実のために重要なことではないだろうか。

５－３．ダイバーシティからインクルージョンへ：セミナー＆ワークショップのレポートから考える①

セミナー＆ワークショップでは作者の家族や施設の職員が作品を持ち寄り、参加者は彼らの語る作品の背景に耳を傾けながら作品を鑑賞した。元来のアート作品とは少し様相の異なる「不思議」で「奇妙」な「面白い」作品に参加者は惹きつけられ、思い思いの感想や質問を支援者に投げかけていた。このセミナー＆ワークショップに参加した学生のレポートから、まずは、参加者が作品の背景にある「障がい」をどのように捉え、それをどのように自己の世界で消化したかについて考えてみたい。

参加学生のレポートから（抜粋）

・何かに縛られずに自由に表現されている作品こそが、本当の芸術なんだろうなという事です。
・今回私は「『一つの作品』『一人の芸術家さん』として向き合おう」ということを目標に参加した。（中略）やはり芸術の世界においては、障害の有無は関係ないのだと感じた。
・障がいを持って産まれたとしても、このような個人個人の才能を持っていて、それで周りの方々に感動を与えることが出来るのはとても素晴らしいことだなと思いました。
・余白が嫌いだからひたすら文字で埋めてみたり、ひたすら同じ絵を繰り返し描いてみたりする点で強い個性を感じました。
・一つ一つどの作品も鮮彩で描いている人がどのような感情で何を伝えたいのかが気になり楽しい時間だった。
・（作家が作品を通して支援者に感謝を伝えたという話を受け）私は普段両親に感謝の言葉をきちんと伝えられていません。だから何か手作りの物などをあげて、しっかりと感謝の気持ちを伝えたいです。
・私がすぐに諦めてしまうことをきっと障がいをお持ちの方は何日も続けられる力があると思うと、

自分を反省するべきだと感じた。

・自分の好きなこと、やりたいことをすることは大切だなと感じました。他にも多くの作家さんが持っている、意思を貫く性格は私の心に突き刺さりました。私もそうなりたいと感じました。

・（作品には）そのままの想いやエネルギーが強く、自分も強く素直に頑張ろうと改めて振り返ることができました。

・私もこれからは多くのことに興味、関心を持って生活していきたいです。そして新しいことに挑戦するときも恐れず、考えすぎずに行動に移していきたいです。

・はじめからできないと決めつけ諦めずにたくさんの方法を探してやり遂げることが大切だと思いました。（中略）私も今後当たり前のことですが、諦めない、一生懸命を大切にし、自分がやることを周りに応援してもらえるような人になりたいと思います。

「障がい者の芸術」という囲い込みが、社会の中で健常者と障がい者を分離してしまうという批判があるが、障がい者と健常者は同一であるという障がい者福祉における基本理念であるノーマライゼーションを前提に「障がい者文化」を理解するほど健常者社会は成熟していないのではないか。むしろ異文化理解の基本である「人は違って当然」という観点から、可視化できる差異を安全な環境下で恐れることなく互いが囲んだテーブルに置き、そこから「共通」を見つけてもいいのではないか。栗田（2016）は何も準備のないままただ障がいを持つ者と接触すれば自己との差異だけが負の方向に顕著に意識されるが、その人固有の特性に着目することは、障がい者に対する固定観念から離れ、コミュニケーションのきっかけや共通点を見出せ、なにかしらの「繋がり」を生む可能性があると述べる。今回のセミナー＆ワークショップでは、作者自身はそこには同席しなかったものの、リラックスした雰囲気の中、作品を通して「どのような性格か」「なにが好きか」「普段はどのように過ごしているか」といった作者の特性に注目できたことは、参加者の障がい者に対するポジティブな態度変容に大いに貢献したと考える。また、アートをメディアとしたことにより、「障がい」を単なる「優劣」として評価するのではなく、そのような作品を生み出す「特性」さらには「才能」として興味深く捉えていることは、障がい者文化の理解への新たなアプローチではないだろうか。

早野（2002、P. 81）は「障害者文化について考えてみると、それが、障害者の中に限定された文化と見るのではなく、障害者の中に健常者の世界に繋がる同一の世界があるという視点から、障害者文化の『健常者社会』への発信が可能であるという視点に立つことによって、障害者と健常者の新たな可能性が見えてくるのではないか」と考える。レポートから学生参加者は「障がい」という自分との差異がそこに存在することを認めつつ、それを好ましい「特性」、や「才能」と捉えている。そういったコメント以上に、障がいを持った作家たちの制作活動における粘り強さや純粋さや素直といった両文化に共通するポジティブな特性を発見し、それを自己の内省に繋げていることが分かる。このセミナー＆ワークショップでは多様性を認識するダイバーシティから互いを認め多様性からの価値を生む出すインクルージョンへ少し足をかけられたのではないかと考える。

5－4.「コミュニケーション」という美しいアート：セミナー＆ワークショップのレポートから考える②

5－3ではアートを通してセミナー＆ワークショップの参加学生がどのように「障がい」あるいは「障がい者文化」を捉えるか、またアートが健常者と障がい者をポジティブに繋ぐコミュニケーションメディアになる可能性について考察した。ここでは別のアプローチとして、障がい者アートの制作過程で見られる作者と支援者の繋がり＝コミュニケーション自体に着目し、それが障がい者アートの魅力になり得

るかについて、再度参加学生のレポートから考察したい。

参加学生のレポートから（抜粋）

・皆さん素敵な笑顔で目がキラキラしていて、作家さんの作品が本当に大好きだということを感じました。（中略）周りの支えてくれている方たちと一緒に作り上げているのだと思いました。
・周りの方が作者に与える影響の大きさを感じました。
・その作品は職員さんがいないと成り立たない部分もあり、作者と周りの人との関係の中で作品はできていることを知った。
・一切指定しない環境があるから、のびのびと独自の発想で作れると思ったと同時に大きな家族愛を感じました。
・（語ってくださった方は）その作品をどのように工夫していかに多くの方に魅力を伝えようか頑張っている姿も見ることができて、私も何か手伝いたいなと感じました。
・職員の方が作品をとても大事にされて、たくさんの思い出を聞かせてもらって、本当に偏見を持っていた自分か嫌になりました。
・保護者の方や関係者の方は皆、決して障害を恥じることなく、自分の子どもや知り合いの方を誇らしく思っていらっしゃっていて、強くてあたたかい方々だと感じました。
・作家さんの気ままさをとても温かく見守っているなと感じました。（中略）作家さんのことをとても尊敬していることが伝わってきました。
・作品一つ一つが人を繋ぐということです。（中略）普段はあまり言葉にだして言わない方が、作品を通した感謝の気持ちを伝えてくれたとおっしゃっていました。

障がい者アートの制作過程において必ず施設職員や家族といった支援者の関与が存在する。作品の材料や道具の選定なども支援者が行うことが多い。時には「無理だろう」と決め付けてしまうこと、あるいはよかれと思ってやったことが作者の可能性を狭めてしまうことがあるという。それも含めて障がい者アートは作者と支援者の共同作業から生まれる作品であるとも言える。また学生レポートでも多く言及されているように、そこには支援者の作者に対する愛情、またその逆も感じられる。作者と支援者の間に交される他を思いやり理解する暖かなコミュニケーションは、我々人間にとって普遍的な感動を与えてくれるものであり、参加した学生の多くがそこに感銘を受けたことが見てとれる。

NASCアート･ディレクターの角地氏も「制作を通して作者と支援者の間で交わされるコミュニケーションがとても美しい」と言う。例えば「作者が筆を動かすまでじっと支援者が待つ、そんな沈黙の中にコミュニケーションの美しさがある」と。筆者はその制作過程のコミュニケーションも含め「作品」ではないかと考える。本来、芸術の評価に必要なのは直感的鑑賞であり分析的鑑賞（作品の背景にある情報をもとにした鑑賞）は二義的なものとされる。「アール･ブリュット＝障がい者アート」と認識され、作品の評価に作者の障がいという特性が考慮されることにより、障がいをもった作者が芸術界のメインストリームにおいて本当の意味で自律できないという批判も前述した通りである。しかし、実際にそこに介在するコミュニケーションの美しさも障がい者アートの魅力の一つであり、またそれが障がいの有無に関係なく、人を惹きつけ繋げる重要な要素となる。障がい者文化と健常者社会と繋ぐためのメディアとしての「障がい者アート」と考えた場合、そういった作者と支援者の関係性の中にある「美しさ」もアートの一部として評価すべきだと考える。そのような伝統的芸術作品にない特異な魅力、かつ人間社会において普遍的な魅力こそが、健常者が障がい者文化という自分ものとは異なる世界に目を向け心

を開く契機になるのではないか。

6．まとめ

障がい者アートは「アール･ブリュット」という名称使用も含め、芸術批判的視点から、そして福祉支援的視点から語られ議論されてきた。日本では障がい者の芸術活動を積極的に支援していく方向に動いており、今後もそのような議論は続けられていくことだろう。もちろん作品の鑑賞方法は個人の自由であり、純粋な現代アートとして評価すること、あるいは「福祉支援」という観点から作品を楽しむこともできる。しかし障がい者アートを「コミュニケーション」という視点から語ったときに、それは障がい者文化と健常者社会を繋ぐ非常に有効なメディアになり得る可能性や、そこに介在する「コミュニケーション」自体の美しさといった語るべき要素を多く秘めている。

最後に今後の課題として､作品に介在した作者と支援者のそういった「コミュニケーションの美しさ」をどのようにアートの一部として「鑑賞者」に伝えていくかということ、そのような魅力あるアートをメディアとして質、量ともに健常者と障がい者の相互の交流を図り、いかにインクルーシブな社会を形成していくことができるかという二点をあげたてまとめとしたい。実際に作品鑑賞と同時にその背景についても紹介するような「語り」の展覧会も増える傾向にある。今後も障がい者アートだからこその展覧会開催の工夫が必要になる。その場合、芸術と福祉だけではなく、障がい者アートを通して社会をどう変えていきたいかといった大きなビジョンを持ったキュレーションが重要であると考える。

参考文献

今中博之(2016)「障害者アート」からの解放『ノーマライゼーション　障害者の福祉』第36巻、21-23。

岩隈美穂 (2002)「障がい者、高齢者とのコミュニケーション」伊佐雅子監修『多文化社会と異文化コミュニケーション』三修社、129-148。

岡部太郎(2016)アートの力で地域とつながる『ノーマライゼーション　障害者の福祉』第36巻、18-20。

加茂川文、有川宏幸 (2015) 障がい者アートに対する大学生の意識について－作者の所属情報の有無が評価に与える影響『新潟大学教育学部研究紀要』第8巻第1号、51-58。

栗田季佳(2016)『見えない偏見の科学』京都大学学術出版会。

小林瑞恵 (2016) 街中まるごと美術館：商店街と協働した取り組み『ノーマライゼーション　障害者の福祉』第36巻、24-27。

小浜逸郎(2000)『「弱者」とはだれか』PHP新書。

末永照和(2012)『評伝ジャン・デュヴュッフェ　アール・ブリュットの探求者』青土社。

服部正(2017年6月3日(土)14時)堀川御池ギャラリー 京都の天才アート企画展「非形態の表象」「アール･ブリュットと支援概念」発表資料

服部正 (2016) 膝が痛い芸術家－アール･ブリュットは支援概念になり得るのか『心の危機と臨床の知』第17巻、61-72。

服部正(2011)『アウトサイダー・アート　現代美術が忘れた「芸術」』光文社新書。

早野禎二 (2002) 精神障害者文化と「健常者社会」:「優しさ」と「気遣い」の文化の今日的意味『東海学園大学研究紀要』第17号、74-91。

宮地麻梨子 (2013) 日本におけるアール･ブリュットの展開－脱境界の芸術と福祉の実践『生涯発達研究』第6号、17-25。